



日本の技術協力成功の背景 情報通信技術研究センターの構想期

元JICA専門家 さとう きよし
左藤 清



1. はじめに

私は、郵政省(当時)在職中、1993年9月から3年間、JICA長期専門家としてKMITLに派遣された。私自身は、それまでKMITLに関しては全く知識がなく、JICA派遣前研修の期間を含む約2か月の準備期間を利用して関係者や関係機関を訪れてお話を伺った。この過程で、KMITLとの結びつきの強さ、関係者の思い入れの深さを感じることができた。JICA専門家として派遣されたことのある飯島敏雄教授にお話を伺うために東海大学を訪問した際には、松前達郎総長、松前紀男学長にもお目にかかることができ、大学を挙げての熱意を実感することができた。

なお、筆者の記憶違いによる誤りがある可能性があるが、ご容赦いただくとともに、ご指摘いただくようお願いする。

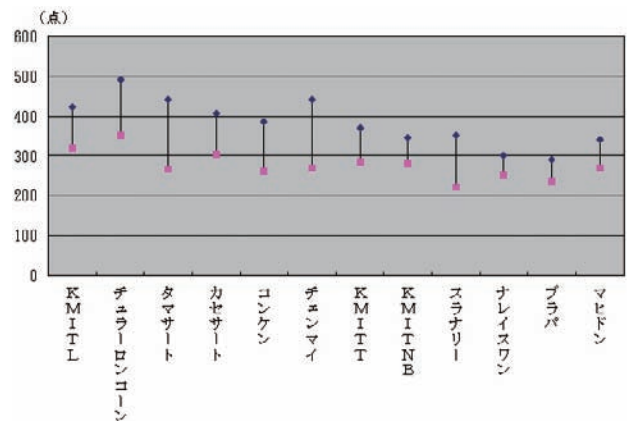
2. 当時のKMITL

KMITLでは、Prof.Dr.Pairash Tajchayapong学長(以下、パイラート学長)のアドバイザーとして、我が国の無償資金協力(1984年～1988年)で建設されたマハー・チャクリー・シリントーン王女学術センター2階の学長・副学長オフィスに執務室を与えられた。パイラート学長は、タイの国費留学生としてロンドン大学に留学し、その後ケンブリッジ大学で博士号を取得した大変優秀な親日家で、多くの方から尊敬され、KMITL学長を退任した後も政府の要職を務めている。

1993年当時、KMITLは、工学部、理学部、建築学部、産業教育学部、農業技術学部の5学部で構成され、その後、修士課程の情報技術学部が設置された。博士課程は工学部の電気・電子系のみを設置されていた。学生数は全課程を合わせて10,604名であった。産業教育学部には日本語の授業が設けられ、筆者の赴任期間後半には、青年海外協力隊員の日本語教師が派遣されていた。

タイでは、共通入学試験の成績を大学レベルの指標とすることができる。図1に1996年の各大学工学部入学試験成績分布を示す。電気通信訓練センターとして発足したKMITLが、タイ最古の伝統を誇るチュラーロンコーン大学に次ぐレベルまで発展していたことが分かる。

KMITLの卒業式はモンクット王の誕生日にちなみ、毎年10月18日に行われ、シリントーン王女から卒業生一人ひと



■図1. タイの大学入学入試成績(工学部)(1996年)

りに卒業証書が手渡される。卒業生は晴れやかなガウンを着て、成績優秀者(2段階)は、名前とともにその旨の紹介が行われ、列席者から拍手を受けるので、非常な名誉であり、勉学の励みにもなると感じた。

1994年の卒業式では、元チーフ・アドバイザーとしてJICAプロジェクト・チームを率いた徳田修造氏にシリントーン王女から名誉博士号が授与された。



■図2. 名誉博士号を受けた卒業式のガウン姿の徳田修造元チーフ・アドバイザー
向かって左側はJongkol制御工学科教官(ノンタブリ電気通信大学で徳田氏の教えを受け、後に東海大学留学)



赴任した翌年、KMITLにキャンパス・ネットワークが導入された。外部との接続回線容量が19.2kbpsで、かつ、当時の電気通信事情から不安定であったが、今日社会経済のインフラとして不可欠となっているインターネットの可能性を予感することができた。当時のタイのインターネットについては、ITUジャーナル 1995年3月号に寄稿したので興味のある方は参照していただきたい。

1995年頃に新国際空港をKMITLの南側に建設することが決定し、1996年には工事が始まった。現在のスワンナプーム国際空港である。交通渋滞に悩まされ、雨季には道路が寸断されるなど、通勤に苦勞したことを思うと、鉄道と高速道路も整備され、隔世の感がある。

3. いくつかのトピック

(1) 郵政省との協力

郵政省との協力では、技術試験衛星5型 (ETS-V) を用いたパートナーズ計画と通信総合研究所 (CRL、現情報通信研究機構 (NICT)) との研究協力が大きなものであった。

パートナーズ計画では、日本、KMITL、インドネシア (バンドン工科大学) の間にETS-V経由TV会議システムが構築された。KMITL産業教育学部が参加した日本語教育遠隔授業が行われたほか、チェンマイ大学、プーケット工業学校など含めた衛星電波伝搬実験等が行われ、1996年3月に終了した。

1995年10月24日には、タイ北部で皆既日食があり、これに合わせてパートナーズ計画で交流のあったCRL研究者

をJICA短期専門家として招き、パイラート学長の故郷 Kamphaeng Phetにおいて、電波伝搬の観測を行った。

筆者は皆既日食を初めて見たが、皆既になった瞬間に黒い太陽の周りにそれまで太陽の光に隠されていたコロナがほわっという感じで広がり、今もその感動は鮮やかによみがえる。

CRLとの研究協力に関しては、1994年8月に研究協力協定に署名され、環境計測分野における協力が始まった。具体的には、レーザーを使って高空のチリを計測するLIDARとレーダーを使って上空の風速、風向を計測するウインド・プロファイラ・レーダーがKMITLに設置され、CRLの指導の下、継続的な観測を行った。



■図4. CRLとの研究協力協定署名
パイラート学長と内海郵政省国際部長



■図3. 皆既日食 (1995年10月24日)



■図5. KMITL敷地内に設置された環境計測装置
右はLIDAR、左はウインド・プロファイラ・レーダー

この結果を受けて、KMITL、タイ科学技術産業省及びJICAの協賛で「電波とレーザーによる環境リモートセンシング・セミナー」を1995年12月にKMITLで開催した。



■図6. 36周年を記念したKMITL技術展示会
モンクット王銅像にお参りするシリントーン王女



■図7. 技術展示会でKMITL教官から説明を受けるシリントーン王女
王女の左側は山口俊一郵政政務次官

(2) 設立36周年記念イベント

KMITLで技術展示会を開催する構想があり、当初1995年6月に開催される予定だったが、王太后（プミポン国王の母）の死去もあって1996年7月に延期されることになった。タイには中国の影響を受けて、12年（十二支）で一巡りの考えがあり、ノンタブリ電気通信訓練センター設立に関する日-タイ政府間技術協力協定調印から3巡目（36年目）になることから、技術展示会とあわせて記念イベントを行うことをKMITL幹部に提案し、記念シンポジウム、記念式典等を行うことになった。

技術展示会では、KMITLから日本の協力が求められ、郵政省と相談してNTTグループの協力によるPHSデモンストレーションを行うこととした。また、バンコク日本人商工会議所通信部会を通じて在タイ日本企業に技術展示会の説明を行って協力を求め、KDDの海底ケーブル探査ロボット（Explorer）のモデルや日本メーカーの展示が行われた。これと並行する形で東海大学の指導の下にソーラーカーの製作が工学部によって行われた。

開会に当たってシリントーン王女をお迎えし、引き続いて通信・放送機構（TAO）との協力による「日-タイ間マルチメディア人材育成（HRD）システムのためのネットワーク技術に関する共同実験」開始式にシリントーン王女に出席していただいた。また、36周年を記念してチュラポーン王女の特別講義「タイ市民生活向上のための科学技術」が行われた。

シンポジウムは「電気通信、エレクトロニクス、回路及び



■図8. 特別講義を行うチュラポーン王女

電子システムに関する地域シンポジウム（RESTECS '96）」と題することとしてJICAの支援を仰ぐこととし、さらに、日本学術振興会（JSPS）に協賛していただいた。日本からは、JICAを通じて白川功大阪大学工学部教授、佐賀健二重細亜大学国際関係学部教授及び古津年章CRL地球環境計測部電波計測研究室長を招請した。

記念式典は、バンコク市内のホテルで開催し、山口俊一郵政政務次官、松前紀男東海大学学長、恩田宗駐タイ日本大使のほか、かつてKMITLで技術協力活動に従事した元専門家、バンコクの日本企業関係者などが参加した。元専門家や功労のあった方には感謝の楯が贈呈された。



■図9. 36周年記念式典(過去の派遣専門家)

(3) 第三国研修

第三国研修は、被援助機関(被援助国)と我が国が協力して技術協力の成果を周辺国に波及させるJICAのスキームである。KMITLでは、1978年2月からアジア諸国を対象に電気通信技術コースが実施され、1993年度に上級電気通信技術コースに衣替えした。1996年の第三国研修には、11か国、21名が参加している。修了式には民族衣装を身につける受講生もいて国際色豊かであった。



■図10. 国際色豊かな第三国研修修了式

第三国研修は、実施機関であるKMITLがJICAの財政的支援を受けて自立して実施しており、講師の大部分もKMITL教官が行っていた。筆者は、日本からの特別講師の調整、在タイ電気通信関係企業への講師要請などの支援を行った。

筆者は郵政省を退職後の2002年3月に招かれて日本の携

帯電話事業について特別講義をする機会を得たが、その翌年、KMITLにおける第三国研修は終了した。日本、タイ両国の事情があった模様だが、電気通信分野における我が国技術協力成功のシンボリックなKMITLを核として、アジア太平洋諸国に定着し、アフリカのザンビアからも研修生を受け入れ始めていただけに残念に感じた。

4. 次期プロジェクトの提案

私が赴任したのは第3次プロジェクト方式技術協力(KMITL拡充計画(1988年～1993年))が終了してから半年後であった。赴任前にJICA本部にあいさつに伺った際、数名のJICA幹部にお話を伺うことができた。一様にこれまでのKMITLへの協力は我が国技術協力の最大の成功例の一つと評価されたものの、今後については、「(日本の協力によって)十分自立し、技術協力の資源をほかに回すべきだ」という意見と「今後も協力を続けて日本との絆を強化することに意義がある」という意見に二分されていた。私自身は、次期プロジェクトの提案を構築することが最大の任務と認識していたが、KMITLへの技術協力継続に否定的なODA関係者を含めて納得させられるものでなければならぬと感じた。

3年間の在任中、日本以外からも多くの来訪者があった。中国や欧米は、KMITLと日本の結びつきを承知した上で、確実に成果が見込める相手と認識しているように思われ、ある意味でこの段階で我が国が手を引けば、果実を持って行かれると感じ、次期プロジェクトをなんとしても実現しなければならないとの意を強くした。

KMITLはタイの社会に有用な人材を供給するという面で確固たる地位を築いていたが、大学のもう一つの機能である研究という面では十分でないと感じた。CRLとの研究協力についても、受け皿としての役割は十分果たしていたものの、その機会を自らの研究に生かし切れていないという印象を受けた。工学部としては、次期プロジェクトで学部レベルの協力を受けてさらに充実を図りたいという要望が強かったが、日本からの技術協力の仕上げる意味でも情報通信分野における研究能力を充実させ、東南アジア地域におけるCenter of Excellenceとなるためのプロジェクト方式技術協力「情報通信技術研究センター計画」を提案し、理解をいただくことができた。英文の名称は、略が発音しやすいことも考慮して、Research Center for Communications and Information Technology (ReCCIT) とした。